# 日本農業経営史の研究

三橋 時雄 著

ミネルヴァ書房

## ≪著者紹介≫


三橋時雄（みつはしときを）

明治44年6月　滋賀県に生まれる
昭和11年　京都帝国大学農学部農林経済学科卒，大学院入学
昭和14年　農史講座助手，同助教授をへて
昭和27年　京都大学教授，農史講座担任，農学博士
昭和50年　同学部定年退官，京都大学名誉教授
現　　在　大阪学院大学商学部教授
主要著作　『京都府農業発達史』（荒木幹雄共著，昭37）
『隠岐牧畑の歴史的研究』（ミネルヴァ書房，昭44）
『肉用牛放牧の研究』（編著，ミネルヴァ書房，昭48）
『戦後日本農業の史的展用』（編著，ミネルヴァ書房，昭50）
現 住 所　京都市左京区銀閣寺前町23



日本農業経営史の研究

昭和54年2月24日　第1刷発行

定価　5500円

著　者　三橋時雄
発行者　杉田信夫
印刷者　林　健次

発行所　株式会社　ミネルヴァ書房
京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話代表（075）581－5191番
振替口座・京都　8076番



© 三橋時雄，1979



太洋社・酒本製本

3061-46015-8028
Printed in Japan

# はしがき

日本の農業はこれから何処へ行くのであろうか。戦後の農地改革によって、戦前の半封建的な農業から解放され、農村の民主化・農業の近代化が進み、明るさを増した日本の農業も、その後における日本経済の高度成長により、土地と労働力とを奪われ、高い地価と労賃の高騰により、また農産物貿易の自由化により、一時、成長部門と見られていた畜産業や果樹作農業も今や限界に達し、農業経営の一層の発展は期し難くなっている。

ことにアメリカが日本に対して農産物貿易の自由化を迫ったのに対し、日本の国内でも、将来のことよりも、いま当面の問題として、安い牛肉やオレンジを食べられる方がよいとして、アメリカの主張に同調するかのような風潮が見られたことは、それが昭和初期の農業恐慌のような深刻さと人々の真剣さがないだけに、却って私に「日本農業は何処へ行く」という不安な気持を起こさせずにはおかなかった。

それにしても、このような言葉が自然に口を突いて出てくるのは、やはり私が青年期に昭和の農業恐慌を見聞してきたからであろうか。わたしが滋賀県の農村に生まれ、膳所中学から京都の旧制第三高等学校へ入学したのが昭和五年で、ちょうど、その頃は世界恐慌の波を受けて半封建的な日本農業は一層深刻な窮乏状態にあったのである。

わたしが三高の文科乙類から、大学は理科系の京大農学部へ進学したのは、このような深刻な農業恐慌のもとにおいて、三高の同級生の殆んどが京都・大阪・神戸などの都市出身者で、住所が滋賀郡下阪本村という農村である田舎者は私一人であったことから、古本屋で見付けた稲村隆一著『農村は何処へ行く』とか、土田杏村著『文明は

何処へ行く』とか、シュペングラーの『西洋の没落』とか那須皓著『農村問題と社会理想』といった書物を読んで、都市と農村、文明と文化、西洋と東洋などの比較による文明論とか、農業・農村問題に興味を持ち、自分でも文乙のクラス同人雑誌『青虬』第五号に「現代文明と農民」という拙文を書いたりした。そして将来は少しでも農村のために役立ちたいと思っていたところへ、たまたま三高の弁論部で招いた農学部教授黒正巌先生の講演が「文化の中央集権と地方分権」というテーマであったので、一段と意を強くし、他の級友たちが、それぞれ法学部・経済学部・文学部へ進む中で、わたし一人が橋本伝左衛門先生や黒正巌先生のおられる京大の農学部へ進むことになったのである。

農学部を卒業後は、大学院で農史（Agrargeschichte）を研究するため、農史講座担当の黒正巌先生と、農業経営学講座担当の橋本伝左衛門先生に指導教授になって頂き、農史の中でも、とくに農業経営の歴史を中心に研究することにした。その時の最初の問題意識が、何故に日本では明治以後も資本家的農業経営が発達しなかったのかということを、歴史学的に究明してみたいということであった。これについては、東京大学在職中は農業史を担当されていた農政学講座の渡辺庸一郎先生をお訪ねして賛成して頂き、農業計算学講座の大槻正男先生も適正経営規模について研究されていたので、わたしも日本農業の特質としての小規模経営を歴史的に研究することにしたのである。

わたしが農業史の中でも、とくに農業経営史の方向へと歩み出したのは、右のような経歴からであるが、とくに農業経営史を意識して書き始めた論文としては、昭和一七年の「江戸期に於ける耕作規模の縮小化―日本農業経営規模の史的考察　その一」（『経済史研究』二七の三）であり、「検地の農業経営に及ぼせる影響」（『農業と経済』九の六）である。これらは徳川時代の地方（じかた）役人が書き残した「地方書」や、「農書」に依拠した研究であるが、このような活字になった資料でなく、直接に筆で書かれた近世の古文書を日本経済史研究所の先輩たち（上田藤十郎・吉川

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秀造・江頭恒治・堀江保蔵・黒羽兵治郎・寺尾宏二・宮本又次・喜多村俊夫らの諸氏）と共に地方に出かけて行って蒐集し、それらの根本史料に基づいて書いた論文が、「近世封建時代の隠岐牧畑」（『社会経済史学』一二の九）であり、「近世能登の大百姓」（『経済史研究』三一の一）である。そしてこれらは近世後進地の事例で、京都からは少し距離があるので、農学部の農史資料採訪旅行（参加者は農史研究室の宮本又次・鋳方貞亮・喜多村俊夫・飯沼二郎・福島よしゑ・沼崎英助・三橋時雄のほか上記日本経済史研究所の人々）で蒐集したが、京都に近い畿内先進地の事例として書いた「近世前期畿内の地主農業—堺近郊北村家の商業的地主手作経営」（『農業経済研究』二八の一）や「寛政期畿内棉作地主の経営経済分析」（『ヒストリア』第一七号）などは、戦後における物資不足の中で近世庶民史料が散逸するのを防ぐために、社会経済史学会の代表理事野村兼太郎博士らによって組織された文部省の近世庶民史料調査委員会のメンバーに私も加えて頂き、近畿部会委員長である京大経済学部堀江保蔵教授のもとで、前田正治・永島福太郎らの諸氏と共に旧家の史料を探訪する機会に恵まれたことや、京都大学国史研究室の小葉田教授を主班とする共同研究「近畿地方における村落の研究」に農学部から三好正喜氏と一緒に参加させて頂いたことなどのお蔭である。

そこでは、古文書の読み方などについても、教えられるところが多かったが、近世における農業経営の研究としては、古文書を読解しての論述に止まらず、農業経営の内と外における数量的な把握も必要である。そのため、これらの論文では、それ以前に多かった社会経済史的な研究方法以外に、農業経営学的な研究方法と統計的手法が研究に取り入れられ、それが本書の一つの特色ともなっている。

近世から近代・現代へと時代が下るにつれて、統計的な資料も一層多くなるため、研究論文の中に取り入れられる統計数字も多くなり、上記のような統計的手法による研究の傾向は一層顕著になるのである。

それに引きかえ、中世・古代・原始時代というふうに時代を遡るにつれて、農業経営史の研究は、上記のような

直接的な根本史料によることが難しくなるので、第二次史料によるか、場合によっては補助的に考古学や民俗学や社会学や地理学の研究分野で得られた研究成果が本研究に対する重要な参考資料となっている。

中世の「名田の分割と農業経営規模—日本農業経営規模の史的考察　その二」（『経済史研究』三〇の三）や「隠岐における名に就いて」（小野武夫博士還暦記念論文集『日本農業経済史研究』上）などでは、京大国史研究室で史料を見せて頂きながら、今は亡き田井啓吾氏や清水三男氏らに教えを受けるとともに、その頃は江頭恒治氏のほか松本新八郎・石母田正・藤間生大氏らの著作に負うところが大きかった。

古代ならびに原始時代については、戦前に農史研究室で一緒に研究した鋳方貞亮氏から多くを教わったが、「班田時代の農業経営規模」（『日本史研究』第四号）や「大化前代の農業経営」（関西大学『経済論集』一六の四・五）については、滝川政次郎・沢田吾一・喜田新六ら戦前の古代史家と、戦後における林屋辰三郎・上田正昭・門脇禎二・直木孝次郎らの諸氏に負うところが多かった。そして考古学的なことについては京大考古学教室の小林行雄氏に教えを乞うたこともあるが、一般的に日本史の研究では柴田実氏や奈良本辰也氏など、京大の史学研究会や日本史研究会の皆様から教わることが多かったし、摂河泉を中心とする畿内の農業経営については大阪歴史学会の方々、とくに津田秀夫・小林茂・竹安繁治・高尾一彦・脇田修らの諸氏と、畏友阪本平一郎氏のお世話になった。

なお地方史研究協議会（会長兒玉幸多）の機関誌『地方史研究』には松村安一氏からの御依頼により「地方史と農業経営史」を執筆する機会を与えられた。また日本農業経済学会の機関誌『農業経済研究』には古島敏雄氏のお奨めにより「近世前期畿内の地主農業」が掲載され、佐々木潤之介氏らの目にもふれて、古島氏の著書のみならず、佐々木氏の著『大名と百姓』（中央公論社『日本の歴史』一五）その他にも紹介されている。

そして、このような農業経営を中心とする日本農業史の概論を島根大学・滋賀短大農業部・三重大学・静岡大学・

岡山大学・高知大学・信州大学・神戸大学の各農学部において集中講義する機会が度々与えられたが、長年続いて来た高知大学の講義も今回で終わることとなった。今それらを振り返ってみると、懐しい思い出が走馬燈のように私の脳裡に次々と転回して来て、今更ながら、これら諸大学に対して感謝の念を禁じ得ない。

その感謝とともに、それにも増して有難いことは、現在わたしが奉職している大阪学院大学が、農業経営史を主にしていた私に一般経営史の講義を担当させて下さったことで、それによって私が従来おこなっていた農業経営史の研究を更に広い視野から再検討することができるようになったのである。ここに日頃お世話になっている大阪学院大学の諸先生に感謝するとともに、一般経営史を講ずるために新しく一般経営史の勉強を始め、今日まで直接または間接に何かと教えを受けてきた経営史学会の方たち、わけても前会長脇村義太郎先生や現会長宮本又次氏、ならびに著書を通して御教示いただいている栗田真造先生に対して、本紙面を借りて深く感謝申し上げたい。

以上、「はしがき」が長くなったが、上記のような叙述からも解るように、本書は農業経営という研究対象の歴史的研究をめぐって、農業経済学的、農業経営学的、農業技術学的ならびに経営史学的研究が、相互にどのように関係し補完し合うかということを、明らかにしたもので、本書の持つ一つの大きな意味は、言わば、このような「学際的」(interdisciplinary) な手法にあるということができるであろう。それを逆にいえば、本書は農業経営史といっても、農業経済学ないし農業経営学の書物であり、部分的には農業技術学または農村社会学の書物であり、また歴史学の書物でもあるのであって、単なる経営史学だけの書物として受け取られることがないよう希望する。

終りに本書は文部省の研究成果刊行助成費の援助により刊行されたものであり、研究の遂行過程においても助成を受けたものがある。ここに明記して感謝の意を表わすとともに、本書の出版を引き受けて下さったミネルヴァ書房社長杉田信夫氏ならびに何かと御配慮を頂いた同社編集部長中西啓二・岡山真理子氏に対しても厚く御礼を申し

上げる。なお例年にない暑さの中を原稿の浄書など、何くれとなく手助けをしてくれた妻珠と、校正ならびに索引の作成を手伝って下さった農史専攻の院生金子治平君の労を犒い、最後に長年お世話になった京都大学、わけても農学部・農林経済学教室・農史講座の皆様に対し、心から御礼を申しあげる次第である。

昭和五三年十二月二十一日

著　者　しるす

# 目　次

はしがき

## 第一章　序　論

第一節　経営史の意義……一
(一) アメリカにおける経営史…(一)　(二) ドイツにおける経営史…(八)
(三) 経営史における諸類型…(一九)

第二節　農業経営史の意義……二三
(一) 農業経営学的農業経営史…(二五)　(二) 歴史学的農業経営史…(四九)

第三節　日本農業経営史の意義……六二
(一) 日本農史研究の発展と傾向…(六二)　(二) 日本農業経営史の意義…(七八)

## 第二章　近世以前における農業経営

第一節　日本農業経営規模の史的考察……八四
(一) 弥生式時代…(八六)　(二) 大化前代…(八六)　(三) 奈良時代…(八七)
(四) 平安時代…(八八)　(五) 鎌倉時代…(九〇)　(六) 室町時代…(九二)

(七) 江戸時代…(九三)　(八) 明治時代…(九八)　(九) 後　記…(九九)
第二節　大化前代の農業経営……一〇一
(一) 大化前代の社会構造…(一〇一)　(二) 大化前代の土地所有…(一〇八)
(三) 大化前代の農業経営…(一一一)　(四) 小　括…(一一〇)
第三節　班田時代の農業経営規模……一一三
(一) 班田時代における農民の経済単位…(一一五)　(二) 班田時代における農業経営規模…(一一三)
第四節　名田の分割と農業経営規模……一一七
(一) 平安時代の名田経営…(一一九)　(二) 鎌倉時代の名田経営…(一五四)
(三) 室町時代の名田経営…(一六一)　(四) 付　言…(一六五)

## 第三章　近世前期における農業経営

第一節　近世前期の農業経営……一六八
(一) 近世前期の時代的性格…(一六八)　(二) 近世前期の農業概観…(一七三)
(三) 近世前期の農業経営…(一七八)
第二節　近世前期畿内の地主手作経営……一八二
(一) 村の環境…(一八四)　(二) 村の土地と貢租…(一八六)　(三) 村の人口と社会的構成…(一八九)　(四) 北村家の出自と持高…(一九五)　(五) 北村家の手作経営…(二〇〇)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三節　検地の農業経営に及ぼした影響……二〇九
(一) 近世検地の社会経済史的意義…(二一〇)　(二) 近世検地の二つの性格…(二一二)
(三) 検地の農業経営に及ぼした影響…(二一四)
第四節　江戸時代における農業経営規模の変遷……二一一
(一) 江戸前期の農業経営規模…(二一一)　(二) 農業経営規模縮小への基盤…(二一六)
(三) 農業経営規模縮小の社会経済的背景…(二一〇)　(四) 江戸後期の
農業経営規模…(二一四)　(五) 結　語…(二一八)

## 第四章　近世後期における農業経営

第一節　近世後期の農業経営……二二四
(一) 近世後期の時代的性格…(二二四)　(二) 近世後期の農業概観…(二二八)
(三) 近世後期の農業経営…(二三七)
第二節　近世後期の後進地における地主手作経営……二六三
(一) 伊兵衛家と時国家…(二六四)　(二) 三百苅家…(二六六)　(三) 三百苅家の
「地内」と「陸人」…(二六九)　(四) 三百苅家の大田植…(二七三)
第三節　寛政期畿内棉作地主の経営経済分析……二七八
(一) 古市村の概況と階層分化…(二七九)　(二) 森田家の経営経済…(二八二)
(三) 結　語…(二九四)

第四節　摂津泉尾新田における商業的農業経営……二九九
(一)　新田の開発…(二〇〇)　(二)　地　割…(二〇二)　(三)　耕作者…(二〇六)
(四)　農　業…(二〇八)

## 第五章　近代における農業経営

第一節　明治期の農業経営……三二
第二節　大正期の農業経営……三五
第三節　昭和戦前期の農業経営……三〇
第四節　昭和戦後期の農業経営……三六
あとがき
索　引

《付表目次》


Ⅰ-1-1表　グラースの経営発展段階説……四
Ⅰ-3-1表　日本農業経営史の構造……八〇～一
Ⅱ-1-1表　大宝二年の戸籍から見た筑前国嶋郡川辺里の農業経営規模……八八
Ⅱ-1-2表　天保一四年、大和国結崎における農民の階層表――労働力吸収層……九四
Ⅱ-1-3表　天保一四年農民の階層表――労働力を吸収も放出もしない層……九四
Ⅱ-1-4表　天保一四年農民の階層表――労働力放出層……九五
Ⅱ-1-5表　耕地面積と土地所有（結崎村井戸・明治一四～一七年）……九六～七
Ⅱ-1-6表　耕地面積と土地所有（結崎村井戸・明治三四年）……九六～七
Ⅱ-3-1表　標準郷戸の人数と受田面積……一三六
Ⅱ-3-2表　戸籍計帳からみた男女別表……一三九
Ⅱ-3-3表　戸籍計帳からみた男子細別表……一三九
Ⅱ-3-4表　戸籍計帳からみた女子細別表……一三九
Ⅱ-3-5表　班田時代における農業経営規模……一四三
(A)筑前国嶋郡川辺里の農業経営規模
(B)遠江輸租帳にあらわれた受田面積階層
Ⅲ-1-1表　信州虎岩村における身分別耕作面積……一七九
Ⅲ-1-2表　近世前期後進地（東北型）の農業経営……一七九
Ⅲ-1-3表　近世前期先進地（近畿型）の農業経営……一八二
Ⅲ-2-1表　踞尾村の領有関係……一八六
Ⅲ-2-2表　御蔵入地の貢租……一八八
Ⅲ-2-3表　蔵入地の反別と取米（延宝四年）……一八八
Ⅲ-2-4表　身分別人口（寛文五年）……一八九
Ⅲ-2-5表　下人所持者の家族員数（寛文五年）……一八九
Ⅲ-2-6表　家族員数別の家数と人数（延宝五年御蔵高持分）……一九三
Ⅲ-2-7表　北村家の家族構成……一九四
Ⅲ-2-8表　延宝七年の所持石高別戸数……一九五
Ⅲ-2-9表　新左衛門の持高……一九六
Ⅲ-2-10表　与三五良の持高……一九六
Ⅲ-2-11表　与兵衛作萬田畠毛付高……一九七
Ⅲ-2-12表　延宝一年の木わた作……二〇〇
Ⅲ-2-13表　延宝一年の稲作……二〇〇
Ⅲ-2-14表　延宝二年の木わた田……二〇一
Ⅲ-2-15表　延宝二年の植田……二〇一
Ⅲ-2-16表　稲の品種別作付面積と播種量……二〇一
Ⅲ-2-17表　延宝三年手作木棉……二〇三

Ⅲ-2-18表　延宝三年の手作植田……二〇三
Ⅲ-2-19表　棉作付地別種子量と前作（延宝四年）……二〇五
Ⅲ-2-20表　作付面積の変化……二〇六
Ⅲ-2-21表　遣い男置覚……二〇七
Ⅳ-1-1表　主産地一覧表（明治一〇～一七年）……二四九
Ⅳ-1-2表　耕作方諸入用道具（寛政四年、摂州西成郡御幣嶋村）……二五三
Ⅳ-1-3表　近世後期・後進地（東北型）の農業経営……二五九
Ⅳ-1-4表　沢田家農業経営表……二六一
Ⅳ-1-5表　近世後期・先進地（近畿型）の農業経営……二六三
Ⅳ-3-1表　古市村三郎左衛門株階層構成……二六〇
Ⅳ-3-2表　安永九年森田家収入表……二六三
Ⅳ-3-3表　安永九年森田家の収支……二六三
Ⅳ-3-4表　経営費……二六四
Ⅳ-3-5表　肥料費（粕）……二六四
Ⅳ-3-6表　労働費……二六四
Ⅳ-3-7表　持高および内作高の変遷……二六五
Ⅳ-3-8表　内作総収入……二六七
Ⅳ-3-9表　内作経営費表……二六七
Ⅳ-3-10表　奉公人給銀の変遷……二六八
Ⅳ-3-11表　肥料（粕）価格の変化……二六九
Ⅳ-3-12表　米・綿価格の変化……二六九
Ⅳ-3-13表　寛政五年森田家収入表……二九〇
Ⅳ-3-14表　家計費および賄支給……二九一
Ⅳ-3-15表　棉・稲反当り収益および下作料……二九二
Ⅳ-3-16表　貢租諸掛り・地主・下作人得分比率……二九二
Ⅳ-3-17表　弘化三年の森田家内作経営……二九五
Ⅳ-3-18表　弘化四年の森田家内作経営……二九五
Ⅳ-4-1表　大割・小割の面積地割帳……三〇三
Ⅳ-4-2表　耕作者の屋舗地と耕作反別……三〇七
Ⅴ-1-1表　経営耕地規模別農家数（沖縄を除く全国、明四一～大九）……三一四
Ⅴ-2-1表　大正昭和戦前期における経営耕地広狭別農家戸数……三一六
Ⅴ-2-2表　大正昭和戦前期における専兼業別農家戸数……三一七
Ⅴ-2-3表　東北近畿における経営耕地広狭別農家戸数……三一七
Ⅴ-2-4表　京都府耕作面積別農家戸数（大正三年）……三一八
Ⅴ-2-5表　京都府耕作面積別農家戸数（大正一〇年）……三一九
Ⅴ-2-6表　農家経済の累年比較……三二〇～一
Ⅴ-3-1表　自小作別経営耕地広狭別農家戸数割合……三二一

V-3-2表　東北近畿における自小作別経営耕地広狭別農家戸数割合……三三
V-3-3表　耕作規模別農家戸数（昭一三、久世・乙訓郡町村別）……三四
V-3-4表　耕作面積別農家戸数、耕作面積（昭一三、久世郡）……三五
V-3-5表　耕作面積別農家戸数、耕作面積（昭一三、乙訓郡）……三五

《付図目次》

I-1図　農業経営方式の諸類型……二五
I-2図　農業史学の類型……二〇～三一
II-1図　大化前代の農業経営……一〇四
IV-1図　三軒屋浦（泉尾）新田絵図……三〇一

# 第一章 序 論

本書『日本農業経営史の研究』は、もともと日本における農業の歴史を農業経営に重点をおいて研究したもので、研究の対象が日本の農業であることにおいては、他の研究と変りがない。ただ従来の日本農業史研究には経済史的研究ないし技術史的研究が多かったのに対し、本書はいずれかといえば、日本の農業経営の歴史に重点をおいた経営史的研究であることに、その特色がある。

それでは経済史的研究と経営史的研究とはどう違うのであろうか。日本農業経営史の研究が普通の日本農業経済史の研究とは違った特色を持つとすれば、それはどういう点にあるのであろうか。それを明らかにするためには、経営史的研究とか経営史とは何か。経営史と本書の研究とはどういう関係にあるのであろうか。それらを明らかにするためには、まず「経営史」とは何か。その意義を明らかにする必要がある。

## 第一節 経営史の意義

——経営史の二類型——

経営史とは何かという場合、科学としての経営史は、比較的に歴史が新しいため、まだ確固とした定説があるわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com